

小田原史談

第61号

談会一内
史館6原
史原内
小市文
行田郷
発小郷

白山大権現と番太郎

内田 武雄

此の白山権現の社は小田原市別所町屋田と隣り合せの地、田嶋の大藪につづく竹林の中に祀ってあって、古老の話によると江戸時代から明治にかけて春秋二回のお祭は大そう盛大であつた。

家名 門田長兵衛ニテ凡四十四カ年ニイタル幼名 松右衛門、全忠祐、全勇三郎、全辰之助。

その子孫が私の子供の頃大正の初めまで高田の河原のお地藏様の祀つてあつた塚の上に番助小屋を作つて秋には稲の番人、暮にお火の用心と泥棒の番をかねてやってくれたものです、暮の火の用心には夜の十二時と二時ごろの二回提灯をつけて六尺棒を腰に拍子木を叩きながら河原まわりにあがりましてと言うので内田の人は御苦労さんと言います。

神主 中森日向正
奉祭白山神社氏子安全御祈禱守護
藤原政醇 謹言
(裏) 文政三庚辰年二月五日

世話人 南足柄村向田 遠藤民太郎、下曾我原 内田文太郎、内田兼吉。
東京深川区平井町二一十六 内田尚吉、内田虎治、内田春弥、大西保一。

また村でお葬式が出るとご飯の家の隣りでお葬式の時ご飯たきに番太郎さんを頼んだ、子供心に私が見ていたと聞いております、その家は消えてしまった、最近まで白山権現と其の人達一族の墓が白山社の隣りの竹藪の中にありましたが、昭和四十四年私が小沢病院に入院中、或人が墓地と白山社の跡を買求めブルドーザーで地ならしをしてしまったので、其の跡形もわからなくなつてしまつたが最近内田忠祐さんの墓石が千代の安養寺にある事がわかつたので、住職にお会して色々たづねたところ住職のおかげで本堂の入口に置いてある手洗石は元白山権現の手洗石であることがわかつた

大世話人頭取 飯泉村 波蔵、堀之内村 藤助、鴨之宮村 安五郎、酒

右に記したものが白山大権現の発起人として横額に記されてあつた人々の名目です、此の中の大世話人内田忠祐氏は、江戸時代より高田村に住んで居て長い間忠実によく村のためにかえて下さつたので、高田

当時普通の人はめつたいにはけるものではなかつた、足にはわらぞうりに足袋、それも足の甲で赤白にわかれてるのをはいていて、お正月だけはいつも新らしくさっぱりしていた、その外お祭りなどの時には手桶にふたの付いたもの(岡持)を持って家々からご馳走をもらつてあるいた。

童名 内田忠祐 惣氏子中、国府津村 鳥

再建発起者 昭和十四年五月十七日 東京蒲田区東蒲田一―二五 内田鹿之助 (子孫今横浜に住入)

又村でお葬式が出るとご飯の家の隣りでお葬式の時ご飯たきに番太郎さんを頼んだ、子供心に私が見ていたと聞いております、その家は消えてしまった、最近まで白山権現と其の人達一族の墓が白山社の隣りの竹藪の中にありましたが、昭和四十四年私が小沢病院に入院中、或人が墓地と白山社の跡を買求めブルドーザーで地ならしをしてしまったので、其の跡形もわからなくなつてしまつたが最近内田忠祐さんの墓石が千代の安養寺にある事がわかつたので、住職にお会して色々たづねたところ住職のおか

蔵、前川村 音次郎、田嶋 再建白山大権現

村 松五郎、五取村 田郎 大世話人 幼名内田忠祐

たづねたところ住職のおかげで本堂の入口に置いてある手洗石は元白山権現の手洗石であることがわかつた

吉、鴨沢村 亀五郎、山田 江戸京橋鍋町 宮大工 和

村 卯之助、松田村 富五 泉権次郎

り高田村に住んで居て長い間忠実によく村のためにかえて下さつたので、高田

郎、金子村 長次郎、大友 安永丙申五年ヨリ 文政三

村 長八、藤田村 富蔵、 庚辰二月廿一日

でも大体同じようであつた

村 長八、藤田村 富蔵、 庚辰二月廿一日

かえて下さつたので、高田

でも大体同じようであつた

忠祐墓 遊山院法拵日善 この道祖神は白山権現とな
信士 家紋ききょう 遊雲 らんでいたものです、白山
院妙善日覚信女 右側夢現 権現跡の隣の梅林の道ばた
六十四日死出の旅 かりの 今でも南無法蓮華経の大
宿離れて見れば臘月 内田 きな板碑が立っていて、石
忠祐 夢にさそれれ死出の 碑の裏には嘉永六癸丑三月
旅路に 文政十年四月九日 吉日大願成就家内安全 願
左側文政六年癸未十月十 主辰之助同津弥 セハ山人
二日 内田きく 本準人と記されている。今
そのそばに寛政六甲寅九 はただ道端にありし日を物
月吉日の道祖神がある、元 語っている。

大稻荷神社について

新居 善作

宝永二年(一七〇五)二 った。忠隣は名君の誉高い
月のこと、小田原城主大久 大藩主であったが「故あつ
保加賀守忠増の家系清水清 て」の、改易、という悲運
左衛門の妹に御神託があつ の人となった。
て、当年中にはお城に一大 以来大久保家は永い不遇
吉事あらわれると竹の花田 時代となった。そうした中
中稲荷のお告げであった。 にあってようやく祖先の地
はたせる哉その年の十二月 小田原へ復帰がかない、当
忠増侯が老中職、現今の大 主忠増公が老中職に補せら
臣に補せられたのであつた れたのだから領民までがあ
此頃の大稲荷神社は竹ノ げての喜びであった。そし
花田中稲荷と云はれ今の大 て此のお稲荷さまを崇く信
雄山線緑町駅の西側竹ノ花 仰申上げるようになり、そ
と谷津の境、竹ノ花分の田 の翌年の宝永三年五月現在
の中に祀られた小さい祠で の地に社殿を建立され、御
あつた。 神威あらたかな故を以って
大久保家では二代忠隣公 大稲荷と尊称申上げたので
以来の栄職であつて、城の あり、竹の花田中稲荷を元
内外をあげての大慶事であ 宮と称ぶようになつた。

忠増は江戸藩邸に此の神 社を勧請されて、信仰もこ
との他に厚かつたといわれ る。更に此の神社が小田原
城の鬼門の地に当るところ から鬼門鎮護の神とされ別
当に福泉寺をあて、領内に も稀れた神事祭礼を執り行
なされたものであつた。
翌宝永四年十一月には富士 山の大噴火が起り、宝永山
の誕生、此為め小田原領内 の被害は甚大でことに須走
「すばしり」御厨「みくり や」の降砂は二米を越へ火
の降砂は人家を燃やし更に それを埋つめつめつす惨憺さ
は其極に達したもので、足 柄平野では降砂降灰のため
田畑は全滅となり、砂降り のために川床が上り少し強
い雨降りがあれば足柄平野 が、湖と化す恐れとなり領
民は名主を中心会議を重ね 上、下郡の名主は名主会議
と連日連夜開き、藩主に救 済方を願ひ出した。生きた心
地も失せ果てた折のこと、 幕府から米二万俵、銭二万
兩の救済をされ、ために田 畑の砂掃き、灰掃きが行な
はれ江戸の商人に諸川の川 ざらへを行なはせたので辛
うじて翌年の雨期を前にし て、はつと一息ついたもの
であつたと記録に残されて いる。
大稲荷神社に鶴の描かれ た一對の絵馬が奉納されて
ある。見上げる絵はひど く傷んでいるが、享保二年
五月、小田原城主従五位下 加賀守藤原朝臣、大久保忠
興と読まれる。享保二年は 西暦一七一九年で忠増が老
中職に補せられた年から十 二年に当る。彼の事以来大
久保家が稲荷神社の信崇 されている事情が良く解る
されている事情が良く解る 全国の神社でお城主さま
が自から筆を執つて描かれ た絵馬の奉納されている例
を私は知らない。
更に小田原の算学者、和 算、の算額が奉納されてあ
り此の算額は小田原に現存 する唯一のものの中野敬次
郎先生はいはれる。
いずれもが将来の小田原 の文化財として保存される
べき貴重なものと云へるだ ろう。

大庭氏のこと
神 保 栄
昭和四十四年早春の事で あつた下曾我支所より、山
岸に山岸姓の家があるかと 尋ねられ、下曾我山岸にも
曾我山岸にも山岸姓を名の る家はありませんがどうし
てですかと尋ねたら、越後 の小千谷より問合せがあつ
たとの事でした。
返事を私から出してやっ てくれと住所を知らされた
ので出してやりましたら一 通の手紙が届き、文面に大
庭氏十四代七郎及十五代弥 左衛門景胤が隠遁し土地名
山岸を名乗つて居り、十五 代弥左衛門は歌道に秀で名
人として讃えられる程の人 であつたと云ふが、永禄四
年に上杉謙信が小田原城攻 めに際し其家臣となり越後
に移つた。
其後越後桑原の二宮神社の 神官となり、小千谷近き桑
原へ居住して今日迄で統一 相模の豪族であつた事、永
余りにも惜しい。と声を大 々くさげぶ者である。
此際神社の関係者は申す のであります。

わたる古文書整理に依り、曾 我の里に隠遁して居た事を 知り、是非如何なる土地か
知り度いと分家に依頼され たので市の方へと問合わさ
れたのであつた。
早速私は曾我山岸辺は永 保の昔清原氏の叛に源義家
が追討におもむく途中募兵 の旗挙げの地として奥州よ
りの帰陣に際し、小社を建 立若宮八幡を勧請し奉り祭
祠したと云ひ、里人は君ヶ 塚と未だに伝えられて居る
岡の下であるが、八幡社は 明治初年に宗我神社に合祠
されて居る事も加えて通報 致したのです。
すると分家の山岸家の御 主人夫婦でわざわざ尋ねて
見えましたので、同地及び 曾我一带をお教え申したら
喜んで帰路に着かれました 山岸氏の祖が大庭氏であ
り鎌倉時代より統一して居た

録の昔の事が判明した事を誰一人聞いても居らぬと思
一門の方々が喜んで居られ
ると返事が私に來たのでし
た、私は里人で大庭氏の隠
れ住して居られた事は今は
たいと思ひます。

八丁河原

主筆 柏木 次郎
聞き手 福谷 守蔵

酒匂川堤防に八丁河原と
いう地名が今尚残っている
此地名は長老達によつて伝
えられている、此地名の由
来の確証はないがおよその
判断に基くものである。
八丁河原の道程は酒匂川
から柳屋ポマード小田原工場
に至る約八百米の長方形し
た土地である、此土地の一
部はその昔百数十年前に屋
敷が実在していたことが今
から四、五年前に一農婦か
ら聞いた話である。

この屋敷実在について私
自身調査した結果はほ間違
いないと知つた訳です。
田圃の中を走る古道には
大木の切株があり、不明の
塚上の物が実在し又出土物
から、当時の陶器及び鉄ふ
んの一部が出土しておりま
す。

水の跡と言うべき土地が建
設省横浜国道工事事務所
あたりで、続の堤防より約
60~70cmも低くなつて
また此土地の地層は砂質で
玉石や砂利などで洪水の跡
を物語っている、そして此
跡には松並木になつていて
最近三本ばかり枯れて一番
寿命の長い大木で百二十年
前後で、次々に枯れて今に
何にもなくなつてしまふ情
態である、名勝の松も一本
一本枯れてしまふので早く
対策を考えたいものです。

鉄ふんは酒匂海岸地帯に
多く出土しておる物で、鎌
倉時代に刀や農器具等を作
つた洋などである、此鉄ふ
んは酒匂神社から酒匂中学
校にかけて大小さまざま
物が出土している、土地の
人が八丁河原の屋敷に住ん
でいたが、酒匂川乱流に合
つてから鴨宮の高台に移り
住み現在に至つて、洪

史談会のことども

鈴木 平八

一世を風靡した北条氏の
居城小田原城は、当時の姿
そのままに復元も成り訪れ
る人達は数多く昔時をしの
び乍ら楼上に歩を運べば、
眼前に広がる相模灘と遙か
今は緑なる山の一夜城を眺
れて行くのでありませう。

私が史談会に入会した心、
一言にして云へば昔を知り
たいと思つたからです。戦
後の社会を眺めた時あまり
に過自由であり、即興的で
あります、一部社会が狂つ
て居ります、それには落着
いた社会に是正する事で
先づ己個人から反省が必要
です過去即祖先を知る事で
ありませう、そこに歴史の
重要さと史談会の意義があ
ると思ひます。ほんとうに
私は入会して良かったと思
います、今では未知の人々
とも親しく話し合う事とな
り社会も広く、随つて教へ
られる事も数々あります。
行事の一つである史蹟巡り
に行けば一般観光旅行と異
つて歴史的偉人の行跡を見
専門の先生の話を聞いて貴
重なる知識を吸収する事が
回を重ねるに随つてより多
く出来て行きます、これも
皆思ひは一つの同志的な友
であるからでせう。

私は未だ入会后幾年も経
ては居りませんが幾分考の
異つて居る人もあるようで
すが、これは如何なる団体
にもある事です、余り気
にしない事です、会員であ
る以上誰しも会の向上発展
は念願して居る事と思ひま
す。組織のみを改造したか
らと言つて其の声価は上る
ものでなし要は人であり、
和でありませう。会員の中
には立派なその道の専門家
も数多く居ります、この道
の先生方にはどこ迄も研究
して頂き私共無知の会員を
指導して頂きたいのです、
私達は決して専門的な知識
の持主にならうとは思つて
居りません、中には希望の
方もあるかも。年を老いて
再び勉強しようと言う勇氣
は不足して居ます。

専門家の先生方にしても一
つの研究人物に対する事典
に關しても、甲論乙ばくで
今以つて解決出来得ない事
柄も沢山あります、だから
と言つて私共はその英雄偉
人を否定するものでありま
せん。先生方同志で研究の
為の論争は昔時よりありこ
れも一つの過程でありませ
うが感情がそれに加はりま
すとこれは問題外です。
私共会員は研究者ではあり
ませんが、論争の渦中に入る
必要もなく冷静な心で諸先
生方の研究したその話を楽
しく聞く事でありませう。

その他の史蹟を熱心に探究
して帰路幾分の疲れは誰し
もが味はいます、その時ど
うでせうか歌の好きな人に
は唄つて頂いたら、よく学
べ良く遊べではないが、お
互の心の和も求められるで
ありませう長途反省しながら
眠る事も無駄ではないが
唄ひ合うムードも会員は欲
してはいないでせうか。

編集・専門・企画 各部を新設さる

小田原史談会は編集、專
門、企画の各部を新設した
部員は左の通り(◎は部長
◎は副部長)

編集部◎小林泰助○三橋
正四郎、星野喜久雄、清水
專吉郎、岸達志、新居善作
三津木国輝。

専門部◎加藤誠夫○立木
望隆、内田武雄、難波明、
長谷川英麿、小島章見、竹
見竜雄、福田以久雄、額田
喜代春。

企画部◎杉崎正五○広沢
伊助、宇野応之、相沢栄一
鈴木久子、沖山敏子、鈴木
平八、穂坂行雄、杉山康輔
鈴木貞嗣、小沢寛。



(田辺至画伯画)

小田原駅の小便小僧

額田 喜代春

終戦後日本国民の殆んどが、いらいらしていたので十一代目の駅長剣持桂太郎氏と私が相談して、当時ペルギーの首都ブラッセル市の葦屋の横にある小便小僧を真似て建ててみようということに相談がまとまり、帝展審査員の柴田佳石先生にお話して鑄造されたもので、丁度小田原市が市制十周年記念のため婦人子供博覧会が開催されたのでこの機会を利用して、昭和二十五年十月五日に小田原駅の改札口を入った処に建設した。

それ以来二十年間サッソウとキレイナ小便を二六時中タレ流している姿は平和のシンボルとして、国の内外にその名をとどろかして参りました。

その後昭和二十六年三月に

徳川家康史跡めぐり

和歌 清水専吉郎

たくみななる石組の庭ふむ心地

濱松城の徳川のあと 築山殿の墓のむなしき

戦国のあわれをここに西来院

浜名湖の裏手にいでて広々と

大草山の昼餉賑はふ

茫漠の三方が原の古戦場

忍ぶよすがに夏草しげる

小田原に冗居なじみの風外を

遠州に看る立定のあと

川合ひの断崖の上今もなほ

苦戦を忍ぶ長篠城跡

宝来寺名のみに過ぎて急ぎ行く

豊川稲荷神仏たのむ

歌短 広沢 秀貢

(浜松城)

敵の重囲をときた時に打ちし太鼓

酒井は知力武名をあげしか

(築山ご殿の墓)

虚名残せる武將の妻の哀れなる

末路しのびととき長々付つ (風外の墓)

世を脱し命断つまでの身の成りゆきを 語る如く風外の墓は (長篠城)

幾重にも囲まれし城の生命を けない決死の脱出逃げしか (鳥居の忠節)

援軍の来るをかん高に告げしのみ けう々々と礎の刑を受けしか (鷲巢山の武勇)

一番檜の功をあげたる鷲巢山の 史跡はるばる訪ね来れり (三方ヶ原)

惨敗の不覚をとりて三方ヶ原 生地吸いたる土をわが踏む

北相模音頭 青木 重雄 作詞

- 一、早わらびの萌える日差や大垂水道 峠こえれば金波銀波の湖近く コリヤサ良イトコ北相模
- 二、あぜ道に汗をぬぐえばタチツボスミレ 咲いて真近や権現祭りの桜につつじ コリヤサ良イトコ北相模
- 三、山百合のかおり豊かな小仏道で 木蔭休めば鳴くホトトギス、ウグイス、カケス コリヤサ良イトコ北相模
- 四、紫の色も鮮やか湖の山 藤も咲いてよイチハツあやめに野あざみの花 コリヤサ良イトコ北相模
- 五、雲の峯、朝は丹沢夕は陣場 山に祈って今日も汗した又明日が来る コリヤサ良イトコ北相模

片浦支部の行事

頼朝一族の墓前祭

小田原史談会片浦支部へて陶山文三の墓に詣で冥福支部長松本孝作)では八月を祈り、更に片浦支部が発二十三日午後一時半から石見した新史蹟「佐殿畑」頼朝橋佐奈田神社に於て源頼朝朝公旗上げの奮戦地を訪れ一族の墓前祭(佐奈田寺一香華をたむけ在りし日をし義忠、陶山文三家安)を行のんでしばし瞑目。やがてなった。佐奈田霊社原弁染米神に下って懐旧談に花を師の説経に一同焼香、次に咲せて解散。

で正寿院(福守榮弁師)に